

(1) 概要

急峻な山が日本海に直接迫る能登半島北側は、海から強い季節風を受ける地域であり、多くの集落が内陸部に立地しています。

その中で、大沢・上大沢は、隣り合いながらも絶壁に隔てられた小さな入り江に連なる僅かな平地に居住地を置く集落です。後背の狭い谷地の限られた傾斜面に耕作地を有しています。集落は平安時代以降は志津良荘(しつらのしょう)に属していたと考えられています。

海に面する集落の外周部には高さ4~5mの細いニガタケを垂直に立てて作った「間垣」と呼ばれる垣根を設置し、季節風から家屋を守っています。ニガタケは、里山や河川で採取されてきました。

集落から離れた緩傾斜地には棚田が築かれています。重労働を軽減するために、アテと呼ばれる木を組んだイナハザで稲を乾燥させてから運搬する知恵が見られます。また、海辺では海藻採取などが続けられています。

大沢・上大沢の間垣集落景観は、日本海に面した地域の半農半漁の生活様式の中で、里山の資源を、耕作や独特な形式の垣根に最大限に利用してきたことを示し、貴重です。



冬の大沢集落



間垣と防風林

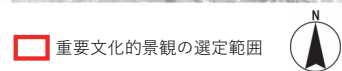
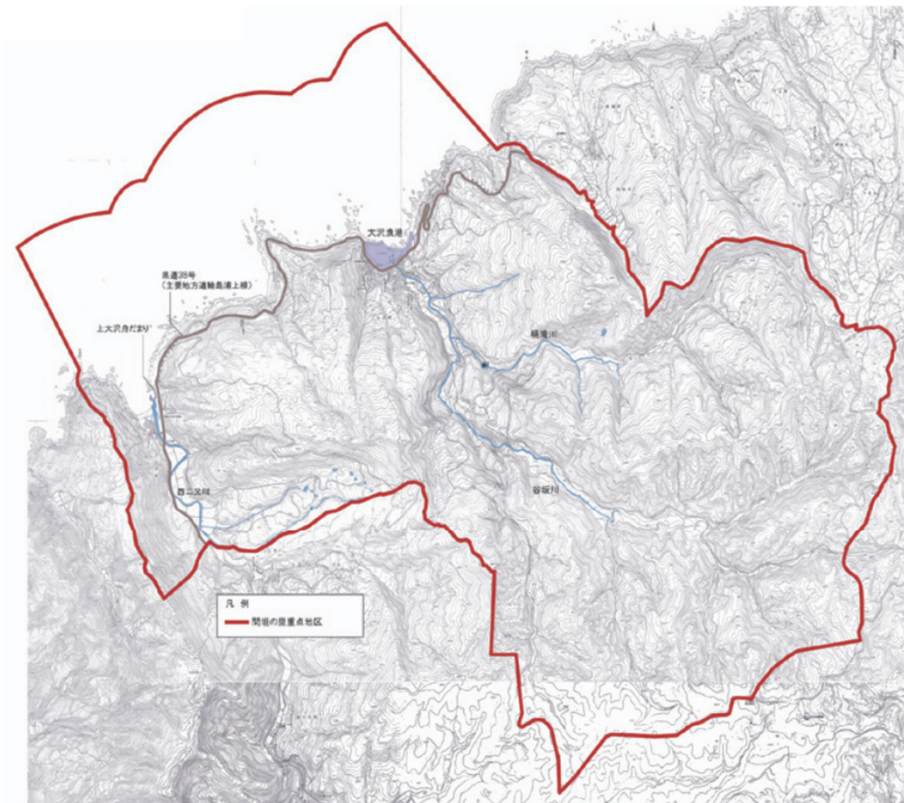


上大沢集落



テンマ船が並ぶ船揚げ場

（２）選定範囲



- 重要な構成要素：39件
- 景観重要公共施設：3件

（３）選定による効果

かつて間垣は、外浦一円で見られたと言われていましたが、集落全体で連続した間垣を残すのは大沢・上大沢のみとなりました。間垣の維持が難しい理由は、補修が重労働で、少子高齢化で担い手が減っていること、里山や河川の環境が変化して材料となるニガタケが入手困難であること、省スペースで維持管理の手間がない鉄骨やコンクリートブロックなどが流通していることなどが挙げられます。

選定を機に、市による間垣の改築への助成、間垣補修ボランティアの募集、ニガタケの育成など、間垣の里を保つための新たな取り組みが生まれ、間垣の里としての保全が進んでいます。



国庫補助事業を活用して
軸部を含めて改築した間垣

（４）保存活用計画などの基礎情報

- 能登・間垣の里 文化的景観保存調査報告書（平成24年3月、輪島市教育委員会）
- 輪島市大沢町・上大沢町間垣の里づくり計画 能登・間垣の里 文化的景観保存活用計画（平成27年1月、輪島市教育委員会）
- ホームページ

<https://www.city.wajima.ishikawa.jp/docs/2016042800025/>

（５）活用事例

事例17-02 ①

地域の暮らしも体験できる、間垣の補修体験

●行政と住民等の協働による取り組み

間垣は、昭和20年代後半の学術調査がなされ、写真集などに取り上げられたことにより、その存在と価値が広く知られるところとなりました。

昭和56年には保存会が立ち上がり、勉強会などが行われてきました。大沢では「大沢間垣保存会」、上大沢では「西保間垣の会」が活動しています。

近年、間垣の補修は、地元の高校の生徒や県内の大学の学生の力を借りての行われてきました。選定後は、さらに取り組みを進め、サポーターバンクの設立に向けての試行的な取り組みとして、地域の組織と市の協力のもと、ボランティアを募り、間垣の補修を実施しました。

補修体験が行われた、平成28年11月の3日間には、地方紙に大きく取り上げられたこともあり、金沢近郊からの参加者を中心に約30人の老若男女が集まりました。

重要文化的景観について学んだ後、保存会の方々とともに3軒の間垣の補修作業に取り組みました。参加者は、婦人会の方々による郷土料理を公民館で食べ、地元の旅館に宿泊し、地域の暮らしも含めて体験しました。こうして、補修作業は和気あいあいとした雰囲気の中で行われました。



間垣の補修体験。参加者はサポーターバンクができたなら登録したいと全員が回答



海の幸、山の幸が盛りだくさんの郷土料理



集落の中では、住民の方による補修作業も



家族連れで参加した小学生の女の子は、地元の子供と姉妹のように仲良くお手伝い

① 地域内での魅力の共有

② 活性化の共有目標

③ 地域外への広報

④ 魅力を引き出す開発

⑤ 財源の確保と運用

⑥ 人づくり